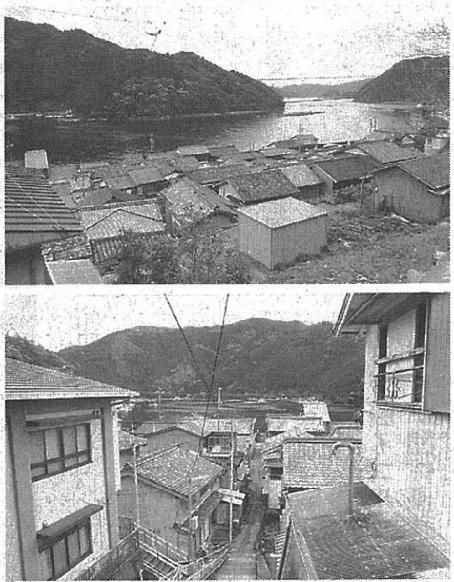


シリーズテーマは「残したい情景」と聞いて真っ先に頭に浮かんだのは、「須賀利漁港」だった。以前瓦屋根の木造住宅が寄り添うように集まる漁村の姿を写真で見て、一度は行ってみたいと思つたところに今回のテーマが示されたので、早々に須賀利漁港に行くことを決めた。

かつては陸の孤島

須賀利漁港は、尾鷲湾の北方、熊野灘に突き出た小さな半島の南側に位置する、尾鷲市須賀利町にある小さな漁港である。昔はマグロやカツオが獲れる港であったが、今は鯛などの養殖が行われている。82（昭和57）年に県道202号線が開通するまでは自動車で行くことができず、尾鷲港と尾鷲市の飛び地である須賀利地区を結ぶ巡航船が主



（上）普濟寺からの眺望
（下）普濟寺へ続く石段から集落を眺める

消防団の分団や、歴史の古そうな神社があつたけど、狭い道路を歩くだけでもノスタルジックな風情を楽しむことができるが、その魅力を最大限味わうためには、集落を見下ろす山腹にある「普濟寺」への石段を登るべきであろう。

須賀利漁港を紹介する写真

の多くは、おそらくこのお寺周辺から撮られたものだ。

つまり撮られたものだ。

ひっしりと瓦屋根が連なる光

景を一望できる。瓦屋根の連

なりの先に入り江が見え、更

東紀州に伝わる風習

半紙の右上には朱書きで

「米寿」とある。つまり米寿

のお祝いであった。調べてみ

るところは尾鷲など東紀州で

みられる風習のようで、中で

も須賀利地区は色濃くこの伝

統が残っているようだ。今回

のテーマは「残したい情景」

であるが、このような慣習も

情景のひとつとして残つても

らいたいと思う。

今回こちらを訪れて昭和の

ノスタルジーを感じたのだ

が、半面厳しい現実も垣間見

えた。集落内に唯一あった簡

易郵便局は16（平成28）年に

一時閉鎖となり、訪れたとき

も再開していなかつた。集落

の西端にある須賀利小学校は

01（平成13）年以来休校と

なつてゐる。そしてノスタル

ジーを感じさせる家々とほつ

まり老朽化しているというこ

とだ。漁港のある入り江の先

には熊野灘、太平洋が広が

る。厳しい現実のため、なお

のこと「残したい情景」と思

うのである。

要なアクセス手段だった。し

かし、この巡航船も12（平成24）年に97年の幕を閉じた。

須賀利漁港の魅力は前述のとおりその町並みにある。南側に港、北側に山が迫つていており、海と山に挟まれた漁村は東西に長く広がつてゐる。狭い宅地エリアに民家が密集しているため、港沿いの道路と、集落の中を東西に横断する道路はどちらも狭く、港沿いの道路は自動車がなんとか通れるものの、集落内の道路は自動車が通れない箇所が多い。

集落内には「おんまり」とした消防車が2台車庫に納まる

現在は公共の交通手段として市内のコミュニティバスが運行している。

（左）軒先に張り出された米寿を祝う手形
（下）簡易郵便局は今も閉鎖中

～文化的歴史的所産を巡る～ 残したい情景

第2回 三重県・須賀利漁港



一般財団法人 日本不動産研究所

閉鎖や休校に老朽化進む家屋

古き漁村に続々米寿の風習

